

健康支援の在り方に関する実践的研究

—京都府 M 保育所における健康支援の取組みと省察を通して—

専 攻 学校教育専攻
コ ー ス 幼年教育コース
学籍番号 M06068E
氏 名 田谷 千江子

【問題の所在と目的】

今日、保育実践現場ではさまざまな課題を抱えている。子どもの身体や心の発達に目を向けたとき「病気や異常ではないが正常とはいえない」という状況に直面することが多い。これは、身体の不調や身体の未発達が関係し、その背景には、生活の夜型化による身体リズムの乱れや運動不足の存在が危惧される。こうした状況を勘案すると、子どもの健康発達に関わる課題を踏まえ、「健康支援」という視点を核に据えた保育展開が必要であると考えられる。

そこで、本実践研究は、保育所において確認された子どもの健康に影響すると考えられる課題点を抽出し、「健康支援」の視点から実行した実践を整理すると共に、その効果を探索的に推定することによって、今後の健康支援の在り方について考察することを目的とする。

【実践の概要】

1. 実践対象園：京都府 U 市 M 保育所
2. 実践視点：日常の保育を通して抱く子どもの健康問題やそれに関わる親の意識や行動について課題を抽出し、子ども自身の健康発達を支える『子育て健康支援（子どもへの健康支援）』と、子どもの育ちを支え親としての育ちを支える『親育ち健康支援（親への健康支援）』へとアプローチする。
3. 健康課題の抽出と実践の力点：前年度の保育課題及び実践当該年度 4 月時点における生活実態調査から、「手洗い指導」「歯磨き指導」「食育指導」の 3 点に力点を置き、健康支援を行うこととした。また、実践仮説として、以下の 3 点を想定した。

① 「五感に訴えかける保育」を意識し、展開するこ

とにより子どもは自らの健康に関心を寄せ、それを増進させる行動を内面化し、『自ら育つ力』を発揮する。

② 「目に見える保育」を展開することにより、親との信頼関係は深化し、我が子の健康に関わる家庭生活の課題を見出し、『親としての育ち』に派生する。

③ ①・②を視野に入れた健康支援実践を展開することにより、保育者自身も学び、保育者育ちとなり、保育全体の質の向上に繋がる。

4. 健康支援の取組みとして抽出した 3 実践の狙い（手洗い指導）

感染症予防を視野に入れた「手洗い指導」を通して、子どもに対しては必要感に基づく正しい手洗いスキルの体得を目指すと共に、親に対しては子どもの感染と清潔行動の関連性理解を促進させる。

（歯磨き指導）

「歯科指導」を通して、子どもに対してはブラッシングスキルの体得を目指すと共に、親に対しては歯磨きと虫歯有病率の関連性理解を促進させる。

（食育指導）

「食育指導」を通して、子どもに対しては朝食摂取の重要性や体調との関連性理解の芽を育むと共に、親に対しては早寝・早起き・朝ごはんの重要性及び子どもにより良い食の在り方に関する理解を促進させる。

なお、上記の実践展開に際し、子どもに対しては「五感を通して得る実感」を重視し、親に対しては壁新聞や健康便りを作成して「目に見える保育」を重視した。子どもに対しては五感に訴えかける保育

によって「事実」を確認し「実感」することが意識や行動変化に繋がること、一方、親に対しては「目に見える保育」を展開することが子どもの状況理解を深め、親の意識や行動の変化に繋がることを想定した。

【実践効果の推定】

1. 「手洗い指導」について

- ・五感に訴えかけることを意識し、手洗い実験を実施した結果、実践1回目と実践2回目を比較すると、実践経過と共に部位別に見た洗い残し割合は改善された。
- ・手洗いと感染症の罹患率との関連を想定して検討した平均欠席日数において、手洗い指導を計画的に実行したH19年度はH18年度と比較して、全体的に平均欠席日数が下回る傾向を示した。

2. 「歯磨き指導」について

- ・歯垢染め出し実験を行った結果、実践1回目と実践2回目を比較すると、実践経過と共に部位別に見た磨き残し割合は改善された。
- ・虫歯有病率は、歯磨き指導を計画的に実行したH19年度はH18年度と比較して減少する傾向を示した。また、全国の5歳児虫歯有病率を各年毎に割合差を算出すると、H18年度はH19年度と比べ縮小傾向を示した。歯垢染め出し実験結果の個別フィードバックと同時に実施した親の仕上げ磨き状況調査を実践1回目と実践2回目と比較すると、実践経過と共に仕上げ磨き率が向上する傾向を示した。

3. 「食育指導」について

- ・食育指導を計画的に実行したH19年度12月時点とH18年度12月時点における子どもの朝食内容を比較した結果、「主食型」が減少し、「主食・主菜型」が増加する傾向を示した。親に対する食育学習会に関わる事例考察から、親の食に関わる意識変化が推察され、そうした結果の反映とも取れる子どもの朝食時の描画変化が確認された。

一連の実践効果の推定を行った結果、評価方法をより精緻に実施していく課題は残るものの、「事実に基づいた実感」や「目に見える保育」の重要

性が示唆され、ほぼ実践仮説通りの結果が得られたものとする。よって、本実践の知見を共有財産化する意図も含めて健康支援実践に向けた概念図を作成した。

概念図に示した通り、常に保育は循環する。保育者が、課題意識を持って循環の始点となり、子どもや親にアプローチする。保育者の意図的な指導・援助が、子どものみならず、親育ちにも派生し、子ども・親・保育者の3者の育ちに繋がるものと考えられた。

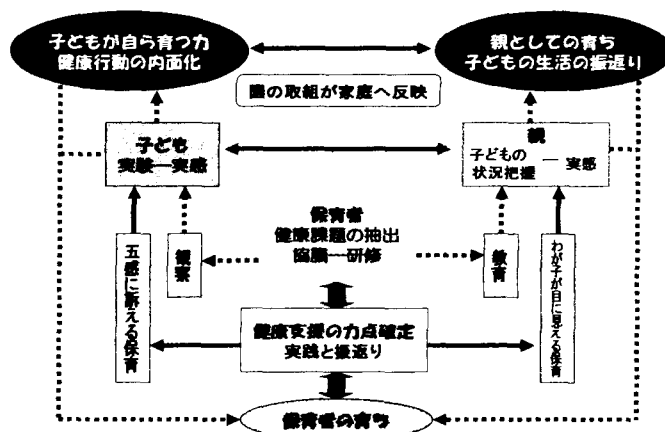


図 健康支援の概念図

【今後の課題】

第1点として、子どもの実践方法で重視したのが「五感に訴えかける」であるが、基本的に視覚情報を中心に捉えており、五感としての位置付けをより考慮した取組を創造する必要がある。

第2点として、本実践の効果は5歳児中心であったことから、その他の年齢段階の有効性が明確になっていない。保育所在園児全体の状況を視野に入れた評価が必要である。また、親との信頼関係を結ぶ手段として「目に見える保育」を重視したわけだが、その評価が事例的検討に留まっており、実質的な信頼関係の深まりを評価し切れていない。さらに、事例的検討方法も断片的な捉えになっている傾向は否めず、より継続的な変化事例を取り上げることによって、より効果が明確化できるものとする。

主任指導教員 名須川 知子 教授
指導教員 嶋崎 博嗣 准教授